備陽史探訪
第58号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

隠れた史跡と伝説を訪ねて

会長　田口　義之

①百谷と足利房丸

「足利右門大夫房丸、実は征夷大将軍従三位足利義澄公嫡子豊後守義範二男なり…」

これを見せられた時には、さすがの私もびっくりしました。各地の家々に伝わる系図や由緒書はたくさん拝見しましたが、ほとんどは江戸時代から明治時代にかけて偽作されたもの。それでも、堂々と先祖を将軍の下に結びつけたものはありません。

「ウソだろう…」とつぶやきながらも目を凝らすと、初めに「房丸神社由緒」とあります。そうです。これは、現在も福山市加茂町百谷に鎮座している房丸神社の創建由来をつづったもの。しかも、明治四年に、時の太政官に差し出したひかえで、一般の系図とはわけが違います。

福山市街から国道一八二号線を北に三〇分、道は山路にさしかかります。風景は一変して、道路の左右には、昔ながらの農村が広がっています。旧安那郡百谷村、現在の福山市加茂町百谷。房丸に興味を持った私は、夏の一日、房丸が隠れ住んだという、ここ百谷を訪ねてみました。

まず道端に車を止め、房丸が住んだという「房丸屋敷」を訪ねました。しかし、屋敷跡は国道の敷地となり、面影はありません。東の山腹にある房丸夫婦の墓も、夏草にさまたげられて断念しました。以前に訪ねた時の記憶によりますと、房丸の墓は、高さ約1mほどの自然石で、はっきりと「永禄二年…足利右門大夫房丸」と刻んでありました。

国道を左に折れると、正面に高い石段が見えます。これが房丸を祭神とした房丸神社です。神社には、永禄四年（1561）の棟札が残り、房丸の没後、その霊を祭るために神社を建立したとあります。さらに、最初に述べた由緒書によりますと、百谷から山ひとつ隔てた東側の加茂町北山の竜田神社も、房丸の宝剣「竜田丸」を御神体として、江戸時代初期の寛文二年（1662）に建立されたと記されています。

伝記によれば、戦国の争乱を避けた足利房丸は、妻と六人の家臣と共にこの地に来たり、屋敷を構えて住みついたといいます。六人の家臣も周辺に住みつき、主人を守りながら農耕に従事したということです。

征夷大将軍の孫という伝承は、今となっては調べようがありません。しかし、疾風怒涛の乱世。将軍でさえ各地を流浪した時代です。房丸のような人物が備後の山間に逃れ住んだということも、ありえたかもしれません。

②謎の大原石塔群

福山市加茂町から険しい山道を越えると、同市山野町に入ります。盆地の中心で小田川を渡らずに左折し、田んぼの小道を北へ進むと、山野中学校の校舎が見えます。ここから西へ急坂を登ると、台地上へ出て、南へ数百m。左に防火用水のあるところを右折して山道へはいると、約百mで正光院跡と呼ばれる一角に着きます。こわれかかったお堂が建ち、右側の山際に忘れられたような石塔群が残っています。

現地に立ってみますと、うっそうと茂った夏草の中に、花コウ岩製の宝篋印塔（ほうきょういんとう）が四基、結晶質石灰岩（こごめ石）製の宝篋印塔が約十基南北に身を寄せるようにして並び、山際にも十数基の小ぶりな石塔群、北側にも五基の五輪石塔が並んでいます。

花コウ岩製の宝篋印塔は高さ一・八mに達する巨大なもので、台座、塔身、笠宝珠、九輪がほぼ完全に残り、文化財に指定されていないのが不思議なくらいです。各々の型式から、時代は南北朝時代から戦国時代のものとみました。

いったい、この石塔群はだれが何のために建てたのでしょうか。謎を解く鍵は、こごめ石製の宝篋印塔にありました。そのうち一基の塔身に「白壁」の銘が入っていたのです。「白壁」とは、室町時代、備後最大の勢力を誇った中世の武家宮氏の五代目、宮元盛の法名です。宮一族とすれば、巨大さといい、見事さといい、謎の一部は解けます。しかしなぜ、宮一族の墓石が山間の小盆

地にあるのか、謎は謎を呼びます。

実を言いますと、江戸時代の書物に、宮氏の墓石は、新市町下安井にあって、そのうちの一基に「白壁」の文字が刻んであるとあるのです。江戸時代までは新市町にあった宮氏の墓石が現在、山野町に残っている―。不可解な話です。

あえて推測すれば、古書に、宮氏の一族で山野に土着した者もいたとありますから、宮氏の子孫の方が荒れるに任せていた宮一門の墓石を山野に移し、供養しようとしたのかもしれません。

宮氏一族といえば、戦国時代、繁栄を極めながら、戦国時代、尼子に属したため、安芸の毛利元就に滅ぼされた悲運の戦国武将です。

今は訪ねる者とてない、これら石塔の前にたたずむと、石塔の主が生きた時代、乱世の厳しさ、むなしさが実感として迫ってくるようです。

③芋原の大スキ伝説

現地を歩いて驚きました。標高四百mの高原の集落は、幅三m程の空堀によって、ぐるりと取り囲まれていたのです。

福山市の中心部から北へ約一五Km、加茂町の谷あいから急坂を車で約十分、ここに空堀によって囲まれた高原の村・芋原があります。

芋原には、この空堀にまつわる不思議な伝説が伝わっています。それは―この地には大昔、大人が住み、牛に大きな鋤を引かせて歩いていた。その跡が「大スキ」と呼ばれる空堀になったのである。大人は、芋原の村を一周したが、南の辺りで石に引っかかり、力を入れたら、そこの土が神辺町の山王山や御幸町の正戸山まで飛んで行った。だから、今でも山王山や正戸山の土の色と同じなんだと。

かつて、芋原の人々は、夜、決して大スキに近付きませんでした。大スキの跡は、夜は魔物が通る道だと信じられていたからです。

もちろん、現在この話を信じている人はいません。でも、現実に大スキの跡と言われる空堀は、芋原の周囲に残っています。では一体、この空堀は、いつ、ダレが築いたのでしょうか？

(1)古代山城説

最近になって唱えられ始めた説で、大スキは『続日本紀』養老三年（719）の条に見える古代朝鮮式山城「茨城」の跡ではないか、という説です。空堀が芋原全体を囲むというように、非常に大規模であるし、この付近は「茨城」が存在したと言われる古代の安那郡抜原郷にあたるため、「茨城」の遺跡が残っていても不思議ではないな考えられるからです。

(2)志川滝山合戦の陣城説

芋原の西南には、谷を隔てて戦国時代の山城・志川滝山城跡が残っていますが、戦国時代、この城が安芸の毛利元就に攻められた時、城方、あるいは毛利方の築いた陣城の跡とする説です。

(3)戦国城塞村説

戦乱が続いた室町時代には、集落や都市も外敵から身を守るために周囲に堀を掘って、村や都市自体を城塞としました。近畿地方にも多くの実例が残っており、芋原の空堀もその名残ではないか、とする説です。

現在、大スキの跡は開拓などによって、年々姿を消しつつあります。発掘すれば、年代・目的なども分かるはずなのですが…それまでは、そっと残しておきたい遺跡の一つです。

④蛇円山

小さいころ、高い山と言えば、熊ケ峯（四三八m）・蔵王山（二二五m）・蛇円山（五四五m）の名前を思い浮かべたものです。中でも蛇円山の名前は「じゃえん」という不気味な響きとともに強い印象が残っています。初めてこの山に登ったのは中学三年生の六月。山麓で登り道を聞いた時、「蛇円きゃあ、蛇円にゃあハミ（まむし）が多いどう」と脅かされたことも、今では良い思い出です。

蛇円山に登るには、府中街道を通ってもいいのですが、車で行くのでしたら、芦田川の土手道を通った方が分かりやすいでしょう。御幸町の中津原から土手道に上ると、すぐ右前方に円すい形の秀麗な山容が見えます。これが、一名「備後富士」とも呼ばれる蛇円山です。芦田川の土手を山守橋北詰で右折、真っすぐ進めば駅家町服部の谷、谷奥で左折すれば登山道へ。私が初めて登ったころは、幅五〇cmくらいの山道をあえぎながらでしたが、今では自動車道も完成し、道標も完備しているので、だれでも登れます。山頂からの眺めは素晴らしく、南は、はるかに瀬戸内海が白く輝き、周囲は雄大な吉備高原の山並みが広がっています。

山頂には、八大竜王を祭る神殿が建っています。この神様は水神で、蛇円山の名の起こりとなったもの。俗に、蛇円山の山容は、「蛇がトグロを巻いた様子に似ている」ところからその名がついたと言われていますが、蛇は古代より、農耕のシンボ

ル・水神として祀られてきた動物―つまり、平野から望むと秀麗な姿を見せるこの山は、古代より「水神のまします神の山」として、いつしか蛇円山と呼ばれるようになったと考える方が妥当でしょう。そう言えば、山の中腹に、岩畳神社と呼ばれる古社がありますが、平安時代以来と言われるこの神社には、昔は社殿がなかったとか。古代、神社には社殿がなく、山や巨石、巨木を御神体としてお参りする拝殿のみでした。その名残なのでしょう。

山頂のすぐ下には、女郎屋敷と呼ばれる土塁をめぐらした広場、山中には、和田屋敷・梶原屋敷・原城と呼ばれる由緒ありげな屋敷跡と山城跡が残っています。戦国のころ、城塞として利用されたのでしょうか。それにしても興味の尽きない山です。

悲しき恋

熊谷　操子

さらでだに、もののの淋しき名にたてる、
嵯峨のあたりの秋の暮、
月は隈なき柴の戸に、忍びて漏らす箏の音は、
峯の嵐か松風か、尋ぬる人のすさびかや、
駒を停めて聞く時は、つま音しるき想夫恋。つま音しるき想夫恋。

これは菊末検校作曲の、琴曲〃嵯峨の秋〃の歌詞である。ふと手を休めて、無意識にその文字の一つ一つを追うていくうちに、底深い部分から、潮のように湧き上がってくる名状し難いなにかが、私を捉えて離さない。そして、いつか読んだこと、友人から聞いた話、一昨年この足で確かめたこと等が、次々と脳裏をよぎるのである。

私はいつの頃からか、年若く幽界に旅立った悲劇の天皇高倉様のファンになっていた。父は後白河天皇。母は平時信の娘である滋子。清盛の妻時子と滋子は姉妹の関係。そして清盛の次女徳子が高倉天皇の中宮であるから、いとこ夫婦ということになる。この頃は清盛の全盛時代であり、しかも院政下という環境の中で、建礼門院（徳子）の推挙で入内した小督の局（中納言藤原成範の娘）との恋に落ちたのも、極く自然のなりゆきのように思えてならない。

小督は清盛の迫害が天皇に及んではと、燃ゆる恋心を押さえて、考えた末嵯峨野に身を隠す。弾正大弼源仲国は天皇の宣旨を受けて、中秋の名月の夜に、賜った馬に乗り、小督を捜しに行く。手がかりとしては柴の片折戸だけであるが、笛の名手である仲国が、小督の弾く〃想夫恋〃を聞き逃す筈はない。嵯峨野の辺りを馳せ回っているうちに、彼女の弾く琴の音を微かに聞き、それを頼りにやっとその住処を見つける。どうしても会いたくないという小督であったが、侍女のとりなしでようやく会えた仲国は、帝の文を渡す事が出来た。ねぎらわれた酒宴のあと、仲国は名残を惜しんで男舞を舞って京へ帰ることになる。この〃駒の段〃はあまりにも有名である。

先日、福山八幡宮で、薪能〃小督〃を観るチャンスが得られた。前から十一番めの席とあって、あの滑るような独特の足許は見ることが出来なかったが、動く舗道を歩かずにいるような、微動だにせぬ上半身は、只々見事というより外はない。その面は小面か、孫次郎か、はたまた増女か、素人の私に見分けのつく筈はないが、その面の下に、ホンモノの美女小督の優しい白い顔を勝手に想像して、いっそうの哀れを感じた私であった。

哀れと言えば、中宮徳子も又哀れである。壇の浦で源氏に引き揚げられた後、洛北大原の寂光院に隠栖して真如覚と号し、父清盛。母時子。夫高倉天皇。我が子安徳天皇の冥福をひたすら祈り、仏道に専念したという。寂光院の前にはだかる翠黛山へ、薪を拾いに行き、背負って帰る建礼門院の姿を想像するだに胸痛む思いがする。

現在、渡月橋の北側に〃琴きき橋〃と彫った石碑が建っている。仲国がここで、

「あれは松風の音だろうか。それとも琴の音だろうか」と、耳をそば立てた場所であろうか。大きいこの石碑は、私をしばし平安の昔へ誘ってくれるようであった。

その辺りで〃小督の墓〃の場所を、年配の男女五人に聞いたが、

「生まれた時から、ここに住んでまっけど、そんなの聞いたことおへんなあ」と、殆ど同じ返事だった。六人めに聞いたのは駐在所の位置であった。目と鼻の先にあったのに、小督の供養塔を探すのに随分時間がかかった。大きいホテルや、小督の名を借りた立派な料理旅館等がひしめきあって建っているその中の、ほんの僅かなスペースの薄暗い所に、ひっそりと寂しく佇んでいた苔むした五輪の塔。思わず合わせた掌は、

しばらく戻すことを忘れていた。

京都と奈良の県境にある浄瑠璃寺（九品寺）の気品ある桧皮葺の三重塔が、又もや眼に浮かんでくる。本堂と相対して、厳然たるその姿を池に映す様は、只々ため息で観るのみ。天皇が一条大宮から移築して、この寺に更なる美観を添えた理由は那辺にあるのだろうか。九体の阿弥陀如来に、何をひとりで祈られたのかしら。

「あの那須与一が射落とした扇は、高倉天皇が厳島神社に寄進されたものですよ」と、誰かに聞いたことがある。ご自分の大切な大切な扇を奉納されたそのお心の中も、私はそっと覗き見たような気もする。

こんな悲しい恋を想いつつ、やっと我に返って爪を嵌めた。そしてへたべたながらも、〃嵯峨の秋〃をしみじみと弾いている。

折からすだく虫の音も、心なしかもの悲しく聞こえる夜である。

美星町の探訪（その二）

星田地区、三村氏の事

小島　袈裟春

承久年間（一二一九年頃）地区の田んぼの中に北斗星（北極星）が落下した。

時の領主・妹尾兼定はこれを祀り、北斗星は星の王者である所から「星尾（星王）神社」と称し（主祭神は天御中主尊）、村の名を星田村と改めたと云う。

私はこう云う話が大好きで、胸がわくわくするのである。又妹尾氏と云えば、「平家物語」の中で、備中の勇者として平家の為に、知力を盡して木曽義仲と戦った妹尾兼康の一族ではなかろうか。

その一族が源氏の世の中で、承久年間まで領主であり得たかは疑問だが、「星尾」を「せいお」と発音すれば、妹尾氏の氏神としての意味を帯びて来る。

さて、時代は下って戦国時代、安芸の毛利氏と結んで備中一円を制圧し、松山城（高梁市）を本拠に備前、美作地方に積極的に進出した戦国大名・三村家親の先祖の故地も、この星田地区であったと云う。

探訪の説明書によれば、三村氏は前任地の信濃国洗馬（せま）郷から、承久の変（一二二一年）の後、新補地頭として備中の三山、星田又は川上町の方面に赴任したと思われる、とあるが、これは確定的ではない様なので、私はもうひとつの興味深い論、『小田郡誌』の説で考えて見度い。

どちらが正解か、と云う問題ではなく、興味の問題である。

『小田郡誌』によると、三村氏は元、常陸国三村郷（霞ケ浦の北）に住んで三村氏を称し、寛元年間（一二四三年頃）信濃国洗馬郷に移った、とある。承久の変から二十年余り後の事である。

更に時代は下って鎌倉末期頃、一族の三村孫二郎能実と云う者が備中に来て、星田村に浪居して居たが、元弘三年（一三三三年）後醍醐天皇の招集に応じて船上山に参上し、建武三年（一三三六年）に至って、星田村の地頭職を授かった（『足利直義知行状』）とある。興味があるのは、この「浪居」と云う言葉であって、そこから私の想像がふくらむ。

能実は何か信濃に居られぬ事情が出来て、出奔したのであろう。洗馬には、現在でも三村姓がかなりあるとの事なので、一族挙げての来住ではない、と思う。それに、承久の変の後の地頭職であれば、鎌倉末期の動乱では幕府側に付いて当然なのに、その動きが不明である。

当時、幕府の京都探題方として最後まで戦い、近江国番場で北条仲時に殉死した将士・四百数十名の中に、備中出身者は二十八名ある（『小田郡誌』）。内訳は、竹井氏二名、陶山氏二十名、小見山氏四名、荘（庄）氏、真壁氏各一名で、何れも現美星町周辺の豪族である。

又、元弘元年（一三三一年）楠木正成に呼応して、備後国で後醍醐天皇方として兵を挙げた、桜山茲俊と対戦した備中の武士は、陶山、小見山、庄、那須、真壁、荏原等各氏の留守部隊であるが、三村氏の名はこのどちらにも見当らない。もし、星田村の地頭であれば、周辺各氏の動きを、傍観出来る立場ではないと思うのである。

さて、地頭ではなく「浪人」だとすれば、何故信濃の一武士が、備中まで流れて来て留まったのであろうか・・・。

私は那須氏との関係を考える。

那須与一は屋島の弓の功で、五ケ所の庄を授かったが、その中に信濃国角豆庄がある。証拠のある訳ではないが、接触は考えられる。一三三三年の船上山参陣は那須氏と一緒であった、とある。

この後醍醐天皇の招集は三村氏にとって千載一遇の機会であった。周辺の豪族達は挙って京都に出勤中である。当地に有力者は誰も居なかった。何故なら、二年後の備後、桜山

茲俊の失敗を皆知って居たからである。

何はともあれ、周辺の有力豪族は一挙に賊軍となって、壊滅してしまった。こう云う状態を「無鳥島の蝙蝠（こうもり）」と云うそうだが、三村氏は正に蝙蝠であった。節操がない、と云うのではなく、力量のことである。

それは建武三年の星田村地頭職着任から、約六十年後の応永三年（一三九六年）に至っても、三村氏の所領は星田村のみであった（『細川頼之判物、三村系譜』）。

しかし、この頃から三村氏は蠢動を始める。が、未だ力量はなかった。再び冬眠七十年、文明初年頃、付近の寺社領に目を付ける。が、未だ隣の庄氏の敵ではなかった・・・。

三度目の正直、成羽庄に定着出来たのは天文の初め（一五三二年頃）で、蠢動を始めて百四十年、地頭職を得てから実に二百年後の事であり、同時に一代の英主・三村家親の登場によってでもあった。

さて、星田地区には三村氏初期の館跡と伝え、河岸段丘を削平した畑地があって、城の内、御屋敷の地名が残り、又、背後の山腹の古い五輪塔残欠群も、三村氏墓の伝承がある。

余り要害の地とも思えないが、尾根を越えた西方に相当の規模の金黒山城跡があって、中期の防犯の役割を荷なったのであろう。

さて、星田地区の見学中、若い女性から思い掛けない質問を受けた。

彼女「三村氏は家親を暗殺された時、仕返しすれば良かったのに」

私「仕返しはしたのだけれど、返り討ちに合ったのですよ」

彼女「向うが役者が上と云う事ですか」

時間がなかったので会話はこれ丈だが、彼女の質問の意味は「目には目を、歯には歯を」と云うアラブ式復讐の事なのであろう。そこで、紙面を借りて考えてみる。

宇喜田直家は謀殺、暗殺を有効に活用した。例えば、妻の父・中山信正、祖父の仇・島村宗正、竜の口城主・糧所元常、娘の嫁ぎ先・松田一族、同じく妹の夫・伊賀久隆外等々（立石定夫著『戦国宇喜田一族』）で、その事で直家が極悪陰険の代表の如く云われる所以なのである。その直家の資質は、育ちの環境に起因すると私は考える。

主君・浦上家の重臣であった祖父は、彼が六歳の時、同僚島村の一統の突然の夜襲を受けて、病気中と云うのに殺され、辛くも落ちのびた父興家と共に母の実家で、人々の嘲笑を受けながら養われた十数年の陰忍生活は、彼の心深く、目的の為には手段を選ばぬ冷酷さとたじろがぬ冷静さを植付けたに違いない。

一方の三村家親は、青年期すでに成羽庄を押え、存分の戦略を振るって来た。彼の行動は力強く、陽性で、周辺の豪族たちを心服させるカリスマ性も合わせ持って居た。だが、その子元親は偉大な父の御曹司として育ち、取巻く武将達も又御大将家親に頼り切る、ただ格好の良さが取柄の世間知らず計りの様だった。

復讐の筈の明善寺山城の決戦も、諜報戦のイロハも知らぬが故に、誘い出された事にも気が付かず、生兵法の戦術のまずしさは、二万名もの大軍が四分の一の五千名（何れも伝承による）の直家軍に大敗し、将兵の八割が討死したと云う始末であった。

その上と云うか、家親葬送の直後における伯父・三村親房の行動の如き、百名足らずの兵士で宇喜田の本拠・沼城に事前通告までして突進し、全員討死するなど、目を覆い度い程のドン・キホーテ振りで、とても「目には目を・・・」なんて、薬にし度くても無いのが三村の一族なのであった。

私の三村評は厳しすぎる様だ。私は何故か三村家親が好きなのである。故に家親無き後、舵を失った船の様に迷走した三村一族が何とも歯がゆくて、返らぬ事を愚痴る私なのである。

我が小倉山城跡登頂記

金永　真澄

かつてはいくつかの千数百メートルの山々に登った私も最近は山はおろか探訪の会の例会にも参加していなかった。

しかし、この度は吉川氏ゆかりの地を巡る、という事なので参加する事にした。

但し、妻にも同行を求めた。

それは、昨年六月、脳梗塞を患い、左手のマヒは残るものの、日常生活でかなり色々の事ができるようになった、しかし、着替え等妻の手を借りねばならない事がいくつかあったからである。

勿論、彼女は快く（少なくとも私はそう思っている）同行を承知してくれた。

何点かの準備をしてその日を心待ちした。

さて当日、見上げれば、抜けるよ

うな青空の下、心も軽く、身も軽く小鳥の歌は残念ながらなかったが、私達は軽やかな一歩を踏み出した。

やがてバスは山県郡大朝町に着いた。

本日の最初のメニューは日野山城跡への登山である。

私達は惜しくも登れなかった他の三人と共に、犬塚（狐塚？）で昼食をとりながら小さなふれあいを感じて下山した。

次のメニューは小倉山城跡登山であったが、これは頂上を目指す事にした。

初めの内は、登山道に、ござや畳を敷いてあったので、『こりゃ楽だ』と思っていたら、世の中はそんなに甘くない。進むにつれて道は細くけわしくなってゆく。妻の声に元気づけられて頂上近くまで来た。

人影が見える。話し声が聞こえる。もうすぐだ、と。ふと見ると頂上直下の数メートルがものすごい急斜面。「こりゃダメじゃ。ここでやめよう」と言っていると、後から佐藤の錦士さんが「あとに悔いを残したらいけまあが」と、ありがたくも尻を押してくれた。

こうして手を引かれ、尻を押されで、やっとこさ頂上にたどり着いた。

妻の右腕は力が入っていてかなり大変だったと思う。

と、期せずして拍手が起こり、後は涙、涙。

熊谷さんがカメラを向けてくれたが、涙の為、カメラの方を見られなかった。

この感激は生涯の糧となるだろう。

（ちなみに、私のこの極度の涙もろさは脳梗塞の後遺症の一つだそうである）そうしてしばらく休んだあと、私達は一足先に下山することにした。

しかし、行きは良い良い帰りは何とやらで、妻と杖を頼りに恐怖と戦いながら一歩一歩おりた。

そして途中のベンチの所まで戻った時、ほんとうにホッとした。

ここから先は楽になる。

私は兼好法師の『木のぼりの上手といいしおのこ』を思い出しながら、枯れ葉を踏んでいった。

少し行くと先に戻った二人の会員が心配して迎えにきてくれた。

これもうれしかった。

やがて、山の斜面の向うからバスが見えた時、私は心の中で快哉を叫んだ。

そして、涌き上がる明日への希望と勇気をかみしめながら最後の道を急いだ。

同行の皆さんに心配をかけながらも、一つの山城跡が征服できたことは、私にとって大きな喜びであった。

皆さんどうもありがとうございました。そして妻よありがとう。これからも私のそばを共に歩んでほしい。

夏井戸遺跡を訪ねて

中島　政子

はじめに

広島市歴史科学教育事業団及び専門家らの調査で、八月三十日の広島市郊外の城の下一号古墳で、五世紀後半、円墳から出土した棒状の金銅製品、日本にも当時の技術先進地の韓国にも出土例がないという第一級資料という。

耳かき兼用の簪説には思わずうなったとある。当然何に使ったのか、が関心の的だという。

四十年まど前まで、日本列島に人が住みついたのは、七千年前の縄文時代のころと考えられていました。

ところが、一九四九年に、故相沢忠洋氏が、群馬県の岩宿の関東ローム層で、旧石器を発見。関東ローム層は、十万年～一万数千年前に富士山が大噴火したときに火山灰が降り積もってできたものですから、相沢氏のこの発見で、一万年以上前に、日本列島に人が住んでいたことが、明らかになったのです。

その後も野尻湖での発掘や三ケ日人（静岡県で発見）、港川人など、一万年以上の人骨が次々と発見され、日本にも旧石器時代があったことがはっきりしました。

私は連休を利用して、栃木県の娘のところへ行き、友人（相沢氏の親戚にあたる人）にお願いして、岩宿遺跡を発見し、日本に石器時代があったことを実証した、相沢忠洋記念館を訪ねることが出来た。群馬県新里村奥沢、地名の示すとおり、あたり一面丘陵地帯が重なったように続く赤城山の南面にあります。

とはいっても、その地理を知らない人には漠然とした話になってしまうと思います。

前に足尾銅山に行ったことがありますので、少し道案内をしたいと思います。

東京浅草の観音さまから歩いて、いくらもかからない「松屋」というデパートの二階が始発駅になっている「東武線」という電車があります。

その電車は、すぐに隅田川を渡って、そこから日光とか鬼怒川とか、あるいは、伊勢崎、あるいは桐生方面に走って行きます。

シーズンには、特に日光、鬼怒川へ行く特急や急行電車が、混みあいます。その電車の中に「急行りょうもう号」というのがあります。浅草を出ると一時間ほどで群馬県の館林、それから栃木県の足利そしてまた群馬県の太田というように、栃木県と群馬県を蛇行するように走りながら、新桐生、赤城駅に浅草より二時間ちょっとで着きます。

この町は赤城山の東麓にあり、大間々（おおまま）渡良瀬扇状地の扇の要の位置に開けた町で、古くはこの町より北方の足尾銅山に物資を供給した宿場として栄えました。

桐生市からはJR足尾線が、渡良瀬川の峻谷と平行してこの町を通過します。この景観は見事なものです。また、町のまん中を国道百二十二号線が走り、北西にのびる大間々、宮城、子持線に沿って赤城山麓へと入り、早川という川の流れを北上すると、静かな丘陵地帯が開け、新里村奥沢という集落に入ります。ここが小字名で夏井戸です。館長の相沢千恵子さんが私達一行を出迎えて下さった。

この日は、相沢氏が発掘した石器を認めて下さった、唯一の恩師・芹沢長介（東北大名誉教授）の講演会があるというので、専門家や学生達などが集まり、お琴とかイベント等が催され、夏井戸遺跡の前は賑わっておりました。

〃黎明時代〃〃私達の祖先〃〃旧石器時代〃

私達は記念館へ吸い込まれるように入った。まず、岩宿遺跡からの旧石器群の黒曜石で作られた槍先型の尖頭石器とか石剥片、黒い縞模様の入ったガラス状のもの、縄文時代の石器などが並べられている。千恵子夫人が相沢氏の想い出話をして下さった。一、遺跡を発掘するときは、自分が旧石器人だったら、どこに住むかを念頭に置いて地形を読むこと。一、発掘の世界に学問的に入ったのではなく、人間的に入ったこと。一、〃これは石と思うな〃一、石器に残された古代人の体温を感じとり、赤土に埋もれた遺跡に古代人の生活の声を聞きとれる人だったとのこと、発掘の原点は、物言わぬ遺跡に人間の息を呼び戻すことなど。

故相沢氏の赤土への執念を頭に置きながら、四十年以上も掘り続けられた石器の一つずつから、何か聞こえて来るような気がした。当然、何に使ったのか、どうやって獲物を、魚や獣を捕ったのか、壁画の原人像を見つめながら、しばらく呆然としていた。故相沢氏が、石器を見れば、それを使った人間のぬくもりを感じ、遺跡に立てば、古代人の家族だんらんを思ったそうです。相沢氏が、赤城山南麓の観現山遺跡、不二山遺跡、赤城磯遺跡、夏井戸など、中部、下部ローム層の新しい遺跡を次々と発見していったのは、強い情熱と信念そのものだと思います。相沢氏は旧石器だけでなく、旧石器人の骨を発見する夢を持っておられたそうです。だが、酸性の強い日本の土壌では、人骨が残りにくく、幻の明石原人の腰骨を除いて、旧石器人骨の出土例はないという。相沢氏の夢だった日本人の起源を解き明かす日はいつだろうかと・・・・。

一泊旅行
吉川氏の史跡を訪ねて
事務局報告

従来、会員の皆さんからの一泊旅行のレポートが数多くあって、それが十分な旅行報告になっていたのだが、今回は、締切り日まであまり期間がなかったためか、ほとんど原稿が集まらなかった。

しかし、先の金永さんの投稿は感動的だった。内容もさることながら、原稿用紙を拝見すると、ご自身と奥様との二人三脚の作品のようであった。これだけのことを記述するのにどれだけのご苦労があったかを考えると、頭が下がる思いがした。

ただ、金永さんの内容は二日間通してではなかったので、事務局の方で日を追って報告させていただくことにする。

十月十日は朝から快晴。それだけでなく、二日間好天に恵まれた。これはひたすら中村副会長のおかげだといわねばならない。副会長はこの日のために、雨を断ち切る祈りを込めて、なんと、自らに〜日間の「女断ち」を課されたそうである（参加者は知ってますよネ）。

さて、出発時には、四十二名の参加があった。立石先生は、翌日、現地合流のランデブーである。

出発すると、すぐビールと酒の仕入れで一旦停車。アルコールがないと成り立たないのが、我が備陽史探訪の会の一泊旅行の伝統なのである。

しかし、初日のキツイ日程を知ってか知らずか、行きのバスではあまり、ビールがはけなかった。

上原女史がウグイスお嬢様（誰ですか、キオスクおばさんなんていうのは）になり、売り込みを開始すると、やはり最初に購入して下さったのが、某副会長であった。

中国自動車道へは三次インターから乗り、千代田インターで浜田自動車道にチェンジする。予定より、若干遅れたものの、無事大朝インターに着いた。下りて最初に行ったのが、「大朝町歴史資料館」である。図書館と共同の建物だが、とても立派で、しかも新しい。出来上がって、それほど年数はたっていないだろう。

館長氏が、資料を配ってわかりやすく説明して下さり、バスの中での末森さんの話と合わせて、吉川氏についてアウトラインをつかむことができた。

資料は、配置がよく考えられており、とても分かりやすく展示されている。なかでも圧巻だったのは、吉川氏の馬印「芭連（ばれん）」で、レプリカではなく、本物の展示である。この馬印は、吉川広家が籠城中の加藤清正を助け、清正から譲り受けたものであるという。もとは純白だったものを、広家が真紅に染めぬいたものということだった。

資料館のあとは、初日のメイン、「日山（ひのやま）城跡」である。講師は、かの末森氏である。どういうコースになるかは、おおよそ想像がつくであろう。ひたすら坂道を登れ、登れの一時間であった。しかし、最初のペースが速い。経験からいうと、これはあとでバテルゾ。案の定、「中城」で全員バタンキューの休憩であった。

ここには、家老屋敷の築山跡があったが、古代の祭祀遺跡のようにも見えて、人気は抜群。記念写真の人も多かった。

さて、あとわずかで頂上と再出発。しかし、日山城は甘くはなかった。険しい道はまだまだ続くのであった。しばらく行くと「姫路丸」。その横に大手門があったらしく、わずかに石垣が残る。

ここを越えると、「大広間の段」熊笹の茂るかなり広い平地である。このあたりに、居館があったのだろうか。さらに進むと、どんな素人でわかる立派な土塁が目に入る。これに沿って、左へ進むと「二の丸」右へ行くと、いよいよ「本丸」である。

勘違いして「二の丸」へ突進する人もあり、隊列はばらけてしまった。

本隊はあくまで「本丸」を目指す。最後の急坂を登ってついに到着。感無量であったが、喉が乾いた。腹が減った。先立つものはビールと弁当である。グビ、グビ、プハーにパーク、パク。さあ殺せ。

ひと心地ついて、詳しく見学する。それにしても規模の大きい山城である。しかも、遺構がよく残っており、説明を聞かなくても、全体像が把握しやすい第一級の山城であった。

ここを下りた後、吉川氏の墓を見た。以後、二日間で数箇所見て回ったが、いずれも墓石がなくて、土饅頭である。また決まったように木が植えられている。何故なのか。帰りのバスでも質問が出ていたが、誰か謎を説き明かして会報に送って下さいな。

この日は、あと小倉山城跡に登った。この辺のことは金永さんの文章をどうぞ。

「おおあさ鳴滝露天温泉」に着いたのは、五時半過ぎであった。意外に客が多かった。

露天風呂は正直いまいち、境を取り払って広々と、やっぱり混浴じゃないと盛り上がりません。

宴会は、いつものように土井さんを頂点とした大カラオケ大会に、〜さんを頂点とした大演説大会。騒々しいことこの上なし。八時四〇分まで全開であった。

九時からは二手に分かれた。神楽見学組とひたすら飲むぞ組である。会長やN連隊長は当然、飲むぞ組。その後どうなったか、私は知らん。

神楽組が、会場の体育館に着いたとき、ガランとしていた。拍子抜けしてしまった。しかし、床に毛布が敷いてあるのは、これいかに。実は場所取りなのであった。敷いてないのは舞台の直下しかない。必然的にかぶりつきでの見学となった。三〇分たつと開演、いつの間にか体育館は超満員。地元の人の熱気が伝わって来る。

神楽は意外にも面白かった。こんなに面白いものだと思わなかった。「潮払い」に「葛城山」（もうひとつは題を忘れた）とも、なかなか良かった。しかし、タイムアウトでタクシーのお迎えとなってしまった。

またいつか見てみたいと思った。

翌日は、みんな早く目覚めた。心地よい疲れが少し残っているが、今日も元気だ、御飯がうまい。大朝の銀シャリは抜群にうまかった。〜さんは四杯おかわりしていた。かくいう私も三杯食べた。

十一日も中身の濃いスケジュールになっている。

まず、龍山神社（八幡宮）に行く。この神殿は、広島県では厳島神社に次いで古いのだそうだ。千木の「内削ぎ」と「外削ぎ」、鰹木の偶数と奇数には、原則があるそうだ。「内削ぎ」「偶数」は女神で、「外削ぎ」「奇数」は男神だという。

ここは、「外削ぎ」で「偶数」。

八幡社は祭神が両方なので、混在しているのかも知れない。

その後、神社下の階段で記念撮影。吉川経高墓、駿河丸城見学ののち、古保利の薬師堂で昼食。午後いよいよ吉川氏の居館跡に行く。

ここは、石垣が印象に残った。江戸期のように、綿密な切り込み接ぎではない。石組の技術者も穴太衆は入っていないだろう。しかし、そのひとつひとつの石の巨大さが、見るものを圧倒する。かつてこの石垣の上に、元春の館があったのだ。いまさらのように、彼の勢力の大きさを実感した。

元春の墓は例の土饅頭、同じようなものを何度もみると、正直やや飽きが来た。

立石先生の説明で、松本屋敷と容光院の話を聞く。年若くして、逝った薄幸の美女を想像しようと努力したが、どうもイメージが湧かない。きっと天気が良すぎたのだと思う。

この後、古代の水道施設が発掘された万徳院を訪れた。発掘途中で、現場が見られたのは幸運だと思う。

書いているうちに、いつの間にか紙面が尽きてしまった。今回の旅行の計画・準備をされた旅行委員のみなさんに心から感謝します。

俳句

中島　政子　作

吉備路　（九月二三日）

萩の花こぼして翔てり明け鴉
峠越え野菊の風となりにけり
古井戸の釣瓶軋めり破芭蕉
懸巣鳴く櫺子の御釜殿
椿の実はぜて吉備路の日和かな
萩咲いて金堂跡の土匂ふ
塔の影田んぼに伸びてあきつ飛ぶ
南瓜の一つころがる国分寺
桐の実や鳴らして買へり吉備土鈴
秋彼岸鼻刎塚を巡りけり
身に入むや阿閦利の墓の破土塀
吉備路より山の雲切れ鳥渡る
穴まどひ古墳の裾に消えにけり

旧山陽道を歩く（九月二六日）

秋天に五色の風船吸われけり
蒲の絮塩田句碑に飛びにけり
貝殻の混じる土塀に烏瓜
鶏頭の影を落とせり脇本陣
蓮華寺の句碑に眞青のいぼむしり

吉川氏史跡を歩く　（十月一日～二日）

威し銃火野山城に谺せり
秋旱一升水汲む紙コップ
馬責の城跡につくゐのこづち
虎の口あたりに構う秋薊
本丸を真近にふふむ山葡萄
彩りや木々の摩れ合う風生まる
秋晴や土竜脅しの風なびく
芸北の十月映す隠沼
薮出でて案山子に会釈したりけり
築山に尾花そよぎて水流る
枝摘むや昼月淡く秋空に
おだやかなお住居あとや藤袴
お薬師へ木犀の香の及びけり
曼珠沙華日差しとどかぬ水牢跡
コスモスや菩提寺の天一穢なき
秋天に急降下せし鷺戻る
昏れはやし畚に馬追つけしまま
綺羅すべて脱ぐ毒蜘蛛や里神楽
里神楽体育館にかぶり付き
酌み交はす釣瓶落しのバスの中

新入会員紹介

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

事務局日誌

八月一日（土）座談会「阿部正弘を語る」コメンテーター＝田口義之、出内博都、後藤匡史、平田恵彦。於市民会館会議室、参加四二名。終了後、恒例のビヤガーデンのはずが、雨模様。いつもの「養老の滝」で盛り上がる。

八月二九日（日）事務局会議参加二名。

八月二四日（火）「小早川家文書を読む」　於中央公民館。

九月一八日（土）第六回郷土史講座「油木の山城と古墳」講師＝田口義之、出内博都、山口哲晶、網本善光。於中央公民館、参加三二名。終了後「養老の滝」で慰労会。

九月一九日（日）役員会。於中央公民館。

九月二一日（火）「小早川家文書を読む」　於中央公民館。

十月十日、十一日　秋の一泊旅行。「芸北吉川氏の遺跡を訪ねて」宿泊「おおあさ鳴滝露天温泉」恒例の大宴会。最高に盛り上がる。参加四四名。

十月一七日（日）会報打ち合わせ。於「ルナ」曙店。参加三名。

第五回 秋の古墳めぐり

庄原の古墳を訪ねて

担当　古墳研究部会

今年は庄原の古墳を取り上げました。三次、庄原周辺は広島県で最も古墳が密集している地域です。県内に約一万基あるといわれる古墳のうち、半数以上がこの近辺に集中しており、古代において、いかに重要な位置を占めていたかがわかります。

埋葬されている人々の多くは、中国山地でたたら製鉄に従事した人々ではないかと推定されていますが、その実態は、まだまだ謎が多いようです。

庄原は、前方後円墳（帆立貝形石墳をのぞく）の数が県下で最も多いところです。昨年の三次の古墳との違いはいったい何でしょう。それは参加して講師の先生（今回は篠原芳郎さん）にしっかりと聞いて下さい。不思議な古墳の旅にあなたも参加しましょう。

バスツアー参加者募集要項

〔日時と集合場所〕

◎平成五年十一月二一日（日）

＊雨天決行。

◎午前七時三〇分、福山駅北口、ホテル「キャッスル」前集合。

〔見学場所〕

◎歴史民俗資料館（倉田百三資料保存館もあります）、瓢山古墳（上野公園内）、旧寺古墳群、唐櫃古墳、鋤寄古墳。

〔参加費用〕（バス代、資料代等実費）

◎会員三千八百円、非会員四千円。

〔参加申し込み〕

◎参加者の氏名、住所、電話番号を明記の上、事務局に郵送か、直接電話で申し込んで下さい。（定員に達し次第締切ります。）

〔その他〕

◎弁当と飲み物は持参。また、山歩きできる服装で参加して下さい。

第八回郷土史講座

吉川氏の遺跡巡り一泊旅行の講師に引き続き、末森さんの登場です。小早川氏の研究にかける情熱は、この方の右に出る人はいません。話せば、一晩中でも話せるということですが、なんとかそのエッセンスを約二時間でまとめていただきます。

開催日　十一月二八日（日）

時間　午後一時三〇分から

場所　福山市中央公民館

演題　「小早川氏の居城　高山城跡」

講師　末森清司（当会参与）

十二月例会

赤坂町の史跡巡り

古代の赤坂郷、中世の津本郷（荘園）の一部、近世には西国街道の街村としての赤坂を、初冬の一日、巡回してみましょう（徒歩例会）。

開催日　十二月五日（日）

＊小雨決行

集合時間　午前九時三〇分

集合場所　JR赤坂駅前広場

見学順路　太田古墳出土遺物（市重文、藤原家）、川上城跡（村上加賀守秀成より十一世在城と伝う）、勝負銅山跡、狸之城跡（川上城の出丸か。ここから展望、説明）、赤坂町公民館（昼食）、八幡宮宝篋印塔（市重文）、石の曼荼羅、採石場、すべり石古墳、イコーカ山古墳と宝篋印塔、赤坂駅解散。

費用　資料代五百円。

＊赤坂への往復交通費は各自負担。

その他　弁当、飲み物持参。山歩きできる服装で参加して下さい。

中世を読む会

日時　毎月第三火曜日。午後七時。年内はあと二回。十一月十六日、十二月二一日。

内容　『小早川家文書』を読む。

費用　初参加者は資料代七百円。

HOT HOT NEWS

会長ラジオにレギュラー出演決定！

田口義之会長が、RCCラジオの小川久志「きょうもいい朝」にレギュラー出演することになりました。

毎月第四金曜日、午前九時四五分頃から放送される「備後歴史散歩」というコーナーで、案内役を務めるとのこと。これは聴き逃せません。

忘年会について

十二月十九日には恒例の忘年会を行いますが、詳細はまだ未定です。要項が決定したら、改めて連絡します。

今年は、草戸千軒発掘調査研究所の岩本正二所長をお迎えして講演会（郷土史講座）を開き、その後、宴会となります。奮ってご参加下さい。

会計から

今年一月の総会で決定したように、来年から会費が三千円になります。会費徴収の際にはよろしくお願いします。

備陽史探訪の会事務局
〒720
福山市多治米町五―一九―八
☎0849（53）6157